随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

手話通訳者検診 ～頸肩腕障害の予防と治療～ 前編

医療法人クラプトン
佐久間内科小児科医院
佐久間　秀　人

はじめに

二本松の佐久間と申します。

平成25年より標記検診を行なっています。今年で13年目。事業主は各自治体（二本松市・福島市・伊達市・福島県）、対象者は各自治体認定の手話奉仕員・通訳者・通訳士。今年は総計27名。

検診の対象となる頸肩腕障害は、頸、肩、腕の痛みや痺れを伴う、手話をされる方にはありがちな健康被害です。特に、手話を常用とする手話通訳者には深刻な問題となります。

昭和54年、札幌市にて嘱託通訳者の頸肩腕障害の発生が報告されました。国内初です。その後、静岡市でも発症が相次ぎ、平成２年滋賀県では全国はじめて労働災害認定（以下労災）が成されました。言い換えれば、それまでの公的な手話通訳業務は、正式な労働とは見做されていなかったということになります。

今でも、労働と見做されていないかのような現実があります。自治体により差はあるものの、二本松市の場合、手話通訳に支払われる時給は2,000円程度です。２時間を超えた時点から30分毎に1,000円の加算があります。交通費は別途。数字だけみると安くはないのでしょうけど、専門性や拘束時間、事前準備まで考えれば、労働に見合った対価とは言い難いところがあります。

健康管理面にしても、頸肩腕障害予防は十分とは云えません。そんな中、予防としての検診を提唱したのが、滋賀医科大学の垰田和史（たおだかずし）先生です。頸肩腕障害の調査研究に取り組み、手話通訳者の健康を守るツールを普及させ、手話通訳者の健康管理制度の構築に貢献されました。

頸肩腕障害について

前述のように、頸肩腕障害は頚部から上肢への身体的負担による、痛み、こり、痺れ、だるさなどの症状を呈する「症候群」です。首や肩の強いこりや、重い感じから、手に力が入りにくい、動かしにくいまで、症状の重さは人それぞれです。悪化するにつれ、イライラ感、めまい、頭痛などの精神症状、自律神経失調症状をも引き起こすことになります。どれほどの重症となっても、ＣＴやＭＲＩの画像検査、血液検査、脳波検査でも異常はみられないのが常です。異常はないため病気とは見做されにくい、それ故に不満感が募る負の悪循環に陥ります。

手話を行うための身体の使い方は、１．肩の位置・動き　２．手指の位置・形・動き　３．口の動き　４．顔の表情から成り立っています。単に、腕と手だけを動かせばいいというものではありません。主に上半身の動きなものの、手話はほとんど立位で行われるため、下半身の支えも必要となります。

まさしく手話通訳には、全身を使いつつの、緊張や喜怒哀楽の精神的な想いが織り込まれています。加えて、視た手話を音声に置き換える「読み取り通訳」、聞いた音声を手話に置き換える「聞き取り通訳」と、瞬時にしての高度な知的反射能力が要求されます。身体

随筆・紀行 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ばかりではなく、視覚聴覚・脳全体にも相当な負担が強いられます。

そこまでの身体的・精神的疲労に晒されれば、頸肩腕障害に陥るのはむしろ当然とも云えます。

故に、身体症状は当然のこととしても、むしろ精神症状が問題となる疾患でもあります。ただそこには、どこまでが本来のその方の気質に由来するものか、どこからが手話通訳に由来するものかの判別が困難な面があります。

その点が、手話通訳による頸肩腕障害を公的な労災と認めにくい現状となっている第一の理由と考えます。

手話通訳者検診との出会い

以前から禁煙支援・禁煙治療に関わっております。仙台での禁煙関係の集まりの後の宴会の席、仙台錦町診療所産業医学センター広瀬俊雄（ひろせとしお）先生に出会いました。

「どこで（診療を）やってんの」と気さくに聞かれましたので、福島の二本松ですと答えますと、

「二本松か、よく行ってんだよ、検診で」。

一瞬、何を言い出すのか。

「手話知ってるか」といきなりです。

「はあ…」

「こーやってな、両手挙げて何十分もな、指動かしてらおかしくなんないわけないの、わかるよな」。

「…それはそうですね」。

そんな返答しか出来ません。

「そーか。だったらな、これからは二本松の手話通訳者検診、あんたに任せっから、頼んだよ。ぼくは歳でさ、もうきついんだよ」。

「はっ？」

突然の笑顔。状況把握にやや時間がかかりました。禁煙支援の集まりの二次会に、聞いたことのない手話通訳者検診の話。

「歳でさ」と言う割に、リュック背負って会場走り回ってたんです。確かに年上とは感じましたが、「きつい」の言葉は似合いません。

「今度、会津若松で検診やるから、来なさいね」。

さらに一方的なお誘いというか指示。会津でも手話通訳検診を行なっているらしい。

何がどうなってんだかわからない、唐突な話の流れです。

ただわたしには、こういった得体の知れない話でも、相手の印象によりすぐノッてしまう考えなしのところがあります。

しばらくした日曜日の朝、指定された会津若松市の何とかセンターにわたしはいました。会津と二本松。どちらも幕末の官軍にボロボロにされた歴史があります。昔から同じルーツを感じていたのも事実です。

検診会場には既に30人程の手話通訳者が集まり、広瀬先生の到着を待っていました。市役所の職員が男女で二人。彼らも手話通訳の資格を持っているようです。はじめは怪訝な目で見られましたが、一応白衣を着ましたので、自己紹介すると、「あらあ、わざわざ来てくださったんですね」と好意的な眼差しに変わりました。

そして広瀬先生到着。

「おお、あんた来てたか。そーかそーか。みんなね、この人今度から二本松の検診やってくれるんだよ」と一言だけ。来てたのかも何も、あなたが来いって言ったんでしょと心の中で呟いていると、「さあ、やるか」と会津検診のはじまりです。

もうね、ぽんぽんぽんぽん動きのテンポが

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊ 随筆・紀行

速いのなんのって。まるで江戸っ子の如くの気っ風の良さです。

検診は二つのステップで成り立っていました。まずは体力測定。腹筋回数、背筋力計測、握力測定、タッピング測定。これは、広瀬先生と一緒にいらしている錦町診療所の看護師さんが担当していました。タッピングは、人差し指がタッピングカウンターを30秒間で何回押せるかを計測する、手指の敏捷性を評価する検査です。指の疲労度を考慮し、タッピング→握力測定の順に行います。

次に広瀬先生の診察となります。あらかじめ渡してあった問診票にいろいろと記入してもらい、出来るだけ短時間で済むように考えられていました。しかし診察では、問診に最も時間をかけているようにも感じました。

筋肉疲労度は、両上肢をくまなく押し圧痛部位を探ります。背部や腰部も同じ。並行してAdson test、MorleyやSpurling、Allen testを行います。この辺りは、はじめて聞く名前も多くたじろぎました。次に頚部・腰部の屈曲伸展、回旋、側屈。最後に上腕二頭筋反射、上腕三頭筋反射、腕橈骨筋反射、膝蓋腱反射の腱反射を丹念に診ていきます。

あまりの目まぐるしさに、何をどうしているのかわかりません。それでも広瀬先生は、「あんたのここんところが疲れきってんだよね、かわいそうに」、「変わってあげられれば変わってあげたい、本音はイヤだけど」、相手を観つつ冗談を飛ばし、笑いを誘っていました。

とにかく流れが早く、１日の見学でモノにすることは不可能と悟り、途中市役所職員の方の診察の際、お断りした上iPhoneで動画を撮らせていただきました。今でも思い出して時々観ています。まさしく名人芸。あたかも、一流の落語家の高座のようでもあります。

最後の時間帯、表情が暗く、まさしく心を病んでいるのが明らかな40代と思われる女性の診察になりました。わたしはもう、後ろに立ち尽くすだけ。それまでは、疑問な点は質問したり勝手なことを試みていたのですが、そこは立ち入ってはいけない領域になっていました。

「おお、よく来てくれましたね。ありがとうございます」

広瀬先生、笑顔のままなもののこれまでのガハハオヤジとはちょっと違う、やさしい雰囲気。女性は、自分から話すタイプではなく、じっと先生を見つめたまま。

「今日は、こっちが来たのですよ。あなたがどうしてるか気にもなっていたし」。

どうやらこの女性、仙台の錦町診療所にも通院しているようです。

「先生に、お会いしたくて…」

「がんばっているんですね。うんうん。続けていることがいい。無理はしなくていい。あなたに助けられている人がいます。今のままやれているなら、今のままがいいんです。変わらなくていい、あなたはあなたのままがいいんです」

消え入るような彼女の声に、広瀬先生は強くもなく弱くもなく、励ますでもなく同情でもなく、淡々とした言葉を投げかけていました。実際にどんな言葉だったか、記憶は曖昧です。でもね、おっしゃっていた中身は同じ。「受容・共感・傾聴」、心理面接の本質です。ここではじめて、広瀬先生が一流の落語家であり、超一流の臨床医・臨床家であることを確信しました。以下、後編に続きます。

（安達医師会）